中国大学事情

学生の「集中力」涵養法

山本忠士

吉林師範大学のこと

私が吉林師範大学に来てから、一年余が過ぎた。この大学は、吉林省四平市にあり、省の重点大学である。三〇万坪の敷地に二二学部三九学科があり、学生数は約一万四千人ほどで、亜大の交流協定大学でもある。

私は、東亜研究所所属であるが、外国語学院で日本語も担当している。日本語専業(学科)は一年から四年まで合計二百五十名の学生がいる。同じキャンパス内にある独立学院にも今年から日本語学科ができて、一期生百三十六名が入学した。組織は違うが、一つのキャンパスの中で日本語を専攻する学生が、単年度で二百名を超すことになった。

独立学院の授業料は、師大本科の約二倍の一万二千元(約一八万円)である。少し高い感じはするが、それでもこれだけの学生が日本語学科に集まった。日本で想像していた以上に、日本語学科は人気があるようだ。「就職がいい」と言うことが理由だという。日中関係の好転も、追い風になっているのだろう。

このまま順調に行けば、四年後には日本語専門の学生が、このキャンパスだけで八〇〇名を超すことになる。日本人にとっては、うれしいことだけれども、卒業後の就職は、大丈夫か、と少し心配でもある。

小黒板の「板書」

最初に、この大学に来て感心したことが二つあった。

一つは小黒板への「板書」制度である。授業の初めの時間に、自己紹介で学生の出身地を黒板に書いてもらった。その場の思いつきであったが、学生たちが次々と地名を板書する様子を見てハッとした。

ほとんど全ての学生が、一点一画をおろそかにしない丁寧な書き方をしたからである。今年もやってみたのだが、一点一画を丁寧に書く様子は、同じだった。

入学後、一、二年生は全員が縦六〇センチ、横四〇センチの小黒板を持ち、月曜日から金曜日まで、先生から出された課題（十文字程度）をチョークで板書する。廊下の両側には、小さな黒板がずらりと並んでおり、先生の添削やコメントもある。誰かが見ているのだろう、不真面目にやっていると、個人名の書かれた注意の掲示が出る。

「漢字」をおろそかにしない精神は、中国文化を大切にすることと同じである。社会主義教育でも、中国の伝統的教育は受け継がれている。教員養成の師範大学としての、文字を正しく美しく書く訓練の一環ではあるが、毎日のその所作が、学生たちの「集中力」の涵養にもなっている。

日本では、学生の私語に苦労する先生方も多いが、ここでは授業で学生の「集中力」が切れることはあまりない。私語する学生はほとんどいない。質問すれば、さっと起立し、姿勢を正して教師の目を見ながらきちんと応答してくれる。

一コマは、亜大と同じ九〇分だが四五分、四五分に分かれ、間に一〇分の休憩がある。昼休みは十一時四〇分から一時半までである。全寮制だから寮が近く、昼寝もできる。それが教室の「集中力」が切れない効果をうんでいるのかもしれない。

個人の集中力のすごさは、試験をやってみると良く分かる。例えば、教室がなんとなくダレ気味のとき、一年生なら書き取りの小テストをやる。五分ほどのものであるが、教室内の空気

がいっぺんに引き締まる。小学校から、試験で鍛えられ、その関門を潜り抜けてきた猛者たちは条件反射的に対応する。

答案は、ほとんどがボールペンで書く。学生に聞くと、大学統一入試（「高考」）は、選択問題は2Bの鉛筆を使用するが、文字を書く問題は必ず黒のボールペンだという。学校でも、小学生の三年生からボールペン使用を指導される。鉛筆のように、何度も消しては書くことはできない。ボールペンで早く、正確に書く訓練は小学校三年生から受ける。書くスピードが早いのに、驚くほど訂正が少ない。書く前に、頭の中で解答が整理されているかのようである。

「日本語能力試験」の解答用紙は、「鉛筆使用」である。二〇〇六年度からは、「ペンやボールペンで書かないでください。」とわざわざ付記された。ボールペン使用が多かったのであろう。

小学校時代から試験で個人の「集中」が訓練され、大学に入ってからは、「軍訓」で集体（団体）としての「集中」を訓練される。

日本の小学校で、正常な授業実施が困難なクラスもあると聞くと、日本と中国との「集中力」の差に愕然とさせられる。

授業の開始・終了のチャイムはない。時間管理は各教師が自分でやらなければならないから、なかなか面倒である。

通過儀礼としての「軍訓」

もう一つは、入学直後から約三週間にわたって行われる「軍事訓練」である。今年は九月一〇日から二七日まで行われた。「軍訓」などというと、鉄砲を持って勇ましくやると思われるかもしれないが、実際には行進訓練が中心である。朝八時ころから五時ころまで、学部ごとに分かれてみっちり行われる。毎日、毎日、「向右看」（右向け右）、「向后転」（回れ右）、「敬礼」、「齊歩走」（前へ進め）と繰り返される。

号令に「集中」しないと足並みは揃わない。何度もやり直しとなる。二二学部あるから、キャンパス内の道路という道路は、訓練の学生たちで一杯である。教職員や上級生は、否応なくそのすぐそばを通りながら授業に向かうことになる。最初は、気分の悪くなる学生も出るが、日に日に隊列や声が揃い、さまになっていく。

今年は、迷彩服着用のグループが多かった。迷彩服と迷彩色の帽子をかぶると、男女の区別がはっきりしなくなり、精悍な印象になるから不思議である。

教練担当の軍人教官は五〇名で、例年、近くの人民解放軍四平駐屯六五五八一部隊から派遣されてくる。

この「軍訓」は、「中華人民共和国兵役法」と「中華人民共和国国防教育法」に依拠して制定された「学生軍事訓練工作規定」によって大学と高校で実施されている。当然ながら「軍訓」評点は、学生の成績表に記入される。

七年前にハルビンの大学で「軍訓」を経験した人に聞くと、当時は、郊外の射撃訓練場で一人五発の射撃訓練があったという。早速新入生に聞いたら、「没有」とのこと。

今年の全中国の学生募集計画は、五六七万人であった。高等教育機関だけで約三千万発になる計算である。高校まで入れて実弾訓練などしたら、膨大な経費が必要となろう。

九月二七日に「軍訓」の集大成として運動場で全体の分列式が行われ、大学の書記、学長などの首脳陣の前で、学生たちは見事な行進を披露した。

三週間近い単純な訓練である。基礎訓練とはそうしたものなのであろうが、よくやるな、と感心させられもした。しかし、その通過儀礼が終わると、学生たちは高校時代の垢を落とし、一人前の「おとな」になるようだ。今年、知人の娘さんが、長春の大学に進学し、同じように「軍訓」の洗礼を受けた。大学での様子は、どうですかと聞いたら、「それがね。あの子、変ったのよ。」とうれしそうに話してくれた。大学入学後は、母親に甘えるような言葉遣いが、ぴたりとなくなったという。

一人っ子政策で子供がわがままになったといわれるが、「軍訓」が子供から大人への成人式的な役割をも果たしているように感じた。

日本では考えられないことである。しかし、自分の国は自分たちで守るというのは、独立国家としてあたりまえのことである。一所懸命に「軍訓」に取り組んでいる学生たちの横を通るたびに、この訓練を重視する中国の姿勢に圧倒されるような思がしたのであった。

（やまもとただし・吉林師範大学東亜研究所副教授、アジア研究所嘱託研究員）